

連載 [ネグレクトが疑われる事例の考察で臨床力をみがく]

全6回

気になる親子関係をみるコツ④

自分から子どもに指示しては駄目を出す母親

小林隆児 (児童精神科医/西南学院大学人間科学部社会福祉学科教授)

1. 問題の核心は関係にある

発達障害や自閉症などと診断される子どもたちの中で虐待(広義)が絡んでいる事例は決して少なくないことを既に述べたが、どのような点に注意をしていけばそれを見抜くことができるか、1つの事例を取り上げながら考えてみよう。

断っておくが、筆者が大切だと思うのは、発達障害か虐待関連か、そのどちらかを判断することではなく、母子双方の関係のありようを丁寧に観察して問題の所在を明らかにしていくことである。ややもすれば子どもだけをみては発達障害とし、母親だけをみては虐待だととらえがちであるが、問題の核心は両者の関係にあると考えているからである。

2. 2歳9カ月の男児とその母親

母親の心配は、息子のことばの遅れと落ちつきのなさであった。満期正常分娩。歩きはじめはやや遅かったが、そのほかの身体運動発達に異常はなかった。1歳4カ月頃にやっと歩きはじめると、どこへでも行ってしまい、しばしば迷子になるほどで、落ちつきのなさが目立ちはじめた。発語は8カ月頃と早かったが、「ママ」などの単語は聞かれたものの、以後ことばの数はさほど増えなかった。なぜか赤ん坊の頃から母親は子どもに英語のビデオを見せ、英語で声かけをするなど、過度に教育熱心なところがあった。2歳となり、ことばの数は増えてきたが、それは日本語と英語の両方だった。

栄養は混合乳で、昼夜問わずよく飲んだ。1歳8カ月で遠方への旅行をきっかけに断乳した。以後、子どもは母乳を欲しがらなくなった。排泄訓練は7カ月から始め、10カ月頃でほぼ自立しかけていたが、つかまり立ちをするようになってからパンツを嫌がりはじめ、今ではオムツを使用している。人見知りはこれまでまったくなく、母親の後追いをすることもなかった。知らない人にも平気で抱っこを要求する。絵本を見るのが好きで、パズルも得意である。動物が好きで名前もよく覚えている。歩きはじめると、知らない子どもや友達をつねったり叩いたりすることが多くなった。最近ではかみつくこともあるという。

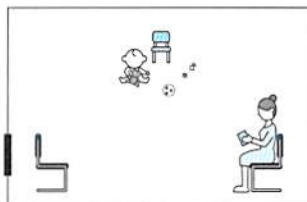
1歳6カ月健診時、母親はことばの遅れが心配で相談したが、2歳まで様子を見るように

言われた。2歳になってもことばが伸びなかったので、保健師からことばの教室を紹介された。子どもは集団行動が苦手であり、列からはみ出したり、急に窓から外の車を見たりするため、保健師から個別相談を勧められた。個別相談では、某子ども療育センターを紹介され、2歳4カ月頃から通いはじめた。療育センターでは、担当医に軽度の自閉症と言われた。そこで出会った母親たちから筆者を紹介されて受診となったケースである。

初診時、母親は育児に対して強い不安を持ち、自分の生い立ちや自分の両親について次から次へと喋りまくる。子どもの話に戻しても、すぐに自分の母親の話になる。療育センターで障害告知を受けてショックを受けたという割には明るく語るのも、子どものことでどこまで不安を持っているのか疑問に感じるほどである。自分の生い立ちが子どもにどのように影響しているのか、とても気になっているとも言う。

3. 新奇場面法 (SSP) からみた母子関係の様相

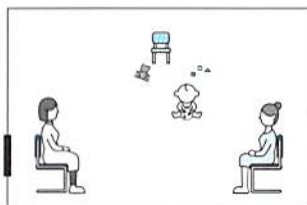
SSP 手順②



②母親は椅子に座り、子どもはおもちゃで遊んでいる(3分)

SSPの手順を説明し、さっそく母子で自由に遊んでもらった。そのときの印象では、子どもはとてもおとなしく、ミニカーや電車を手に持って小声で母親にこれは何かと尋ね、母親は椅子に座ったまま語りかけている。しかし、抑揚の乏しいことばかけで、温かみは感じられない。子どもも母親の顔をうかがうようにして視線を向けることはあっても、おもちゃのほうに目をやっていることが多く、身体的に触れ合ったり、甘えることはない。子どもがいろいろなおもちゃを取り出しては眺めていると、母親はそれが何かと細かく説明している。子どもが何をどうしたいのか、その気持ちの動きに関心は向けられていない。

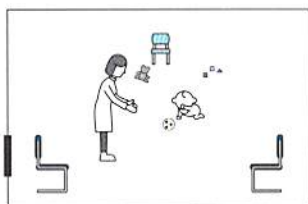
SSP 手順③



③ストレンジャー(ST)が入室。母親とSTはそれぞれ椅子に座る(3分)

ストレンジャー(ST)が入室してからも親子のやりとりはさほど変わらないが、STも場の雰囲気緊張が誘発されたのか、腫れ物に触るようにして男児に過度に優しく接している。母子2人のときよりも子どもの発語が心持ち少なくなったようだ。木琴を叩きはじめるが、やや乱暴でリズム感に乏しい。そのため聴いていても楽しい感じを受けない。表情の変化にも乏しく、楽しそうな身体の動きもみられない。ただ、黙々と叩き続けている。

SSP
手順④



④1回目の母子分離。母親は退室。
STは遊んでいる子どもにやや近づき、
働きかける(3分)

まもなく母親は退室したが、STと一緒に残る子どもを気にする様子を見せず、ためらいなく部屋を出ていく。子どもはすぐに母親が出て行くのに気づいて目で追ってはいたが、後追いをすることはない。表情ひとつ変えることなく、淡々とそれまでやっていた遊びを続けている。STは小声で語りかけながら相手をしているが、子どもは一切声を出すことはない。一見すると母親の不在にも平気なように見えるが、実際には心細くなったであろうことが、子どもの発語が消えたことから見て取ることができる。母親と一緒にいたときには小声でもよく話していたのとは対照的である。やはり警戒心が強まったことは明らかだが、母親を追いかけることは一切なく、心細さも表に現すことはない。語りかけるSTに対して自分から関わりを求めて行動することもない。しかし、STの遊びはよく見ていて、時折STのやっていることをそのまま模倣して遊んでいる。

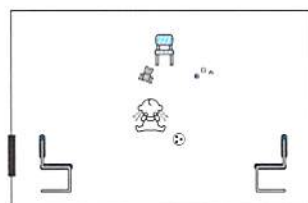
SSP
手順⑤



⑤1回目の母子再会。母親が入室。
STは退室(3分)

母親が戻ってくると、子どもは少しばかりうれしそうに母親を見ていたが、自分から母親に近づくことはない。母親は入室して子どもを見るなり、カバンの中からハンカチを取り出し、即座に子どもの鼻水を拭いている。子どもも母親が近づいてくると、すぐにオモチャを手に取りこれは何だと母親に聞いてもらいたそうに語りかけ、母親との再会によって発語が急に増えてきたのが印象的である。ミニチュアの牛を手に持ち、食べ物などを次々に食べさせはじめる。そばで見ていた母親は唐突に「ウシさん、おなかいっぱい」と言い始める。牛に食べさせることを繰り返している子どもの遊びを見ていて、母親はその遊びをやめさせたくはないからではないか。遊んでいるようにはみえても、子どもは萎縮して楽しんでいるようには感じられない。相変わらず、母親との間ではよそよそしさを感じさせる。

SSP
手順⑥



⑥2回目の母子分離。母親も退室。
子どもは1人残される(3分)

再び母親が退室して子どもは1人ぼっちになる。母親が出ていくのを目で追ってはいた

が、先ほどと同様に目立った反応はみられない。再び発語がまったく聞かれなくなった。一見平気そうに、おもちゃを次々に扱っているが、遊びに集中している様子ではない。

SSP
手順⑦



⑦STが入室。
子どもを慰める(3分)

STが入室したが、特に声を出すこともなく、それまでと同様の遊びを繰り返していた。

SSP
手順⑧



⑧2回目の母子再会。母親が入室し
STは退室(3分)

子どもは母親の入室前からすりガラス越しに見える母親の動きに気づいてドアのほうを見ていた。母親が入ってくると子どもは少しうれしそうな反応を示す。しかし、再び黙々とおもちゃを手にして遊びはじめる。まもなく、なぜか部屋の中を動きはじめた。母親はそれに合わせるようにして「トランポリンや滑り台があるよ」と、子どもに指差しながら教えている。すぐさま母親の誘いに動かされるようにして子どもは滑り台を滑りはじめた。滑り終わるとすぐにもう一度滑ろうと滑り台の階段のほうに行こうとしたが、母親は子どもに「ごろん(前転)しない? ごろんは? マットがあるよ。ごろんしない?」と声をかけた。遊びの流れからすると、不自然で唐突な言葉かけであった。子どもは一瞬戸惑いをみせて滑り台のほうに行こうとしたが、母親は同じことを言い続ける。すると、子どもはマットの上を転がるように前転した。気の乗らない動きであることは見て明らかで、ぎこちなくよるめいたが、それを見た母親は「ちょっとだめね」と否定的な言葉をかけている。

4. SSPにみられる母子のこころの動き

SSP②③から



→母子間には緊張した空気が流れている



→母親の前で萎縮して、遊びを楽しめない



→おもちゃの説明はしても子どもと遊ぼうとしない

2人の間に流れている空気は緊張を感じさせ、お互いにどこかよそよそしい感じを抱かせる。子どもは遠慮がちに気を遣うようにしておもちゃを手に持って母親に示す。すると

母親は、それは何々だと説明だけはするが、2人の間で楽しい遊びは展開しない。そんな空気に触れたSTも萎縮して気軽に声も出せない。

SSP④から



- 心細さは声が消えたことから察することができる

母親が退室すると子どもは母親の姿を目で追うが、後追いすることもなければ心細い表情を浮かべることもない。しかし、実際には子どもの心細さはそれまで曲がりなりにも出ていた声があったく聞こえなくなったことから推測することができる。このように、子どものこころの変化は表情だけでは気づきにくいが、声が消えるといった些細な変化によって気づくことができる。

SSP⑤から



- 母親との再会によって再び声が出るようになる



- 子どもの遊び心を削ぐようなことばをかける

先ほどまで消えていた声が母親との再会によって出ていることから、子どもはやはり母親のそばで多少なりとも安心しているところがあるのであろう。しかし、子どもが遊びはじめると、母親はその遊びが自分の期待に沿っていないと思ったのか、唐突に介入して子どもの遊び心を削ぐような働きかけをしている。そのため、2人の遊びは楽しいものになっていかない。

SSP⑧から



- 子どもに遊びを促しながら駄目を出す

2回目の母子再会で子どもは少し安心したようにして再び遊びは始めるが、母親は子どもの動きを気にすることなく、自分の目についた遊具を子どもに示して遊びを促しはじめる。すると、子どもは母親の指示にためらいつつも、言われるがままに遊びはじめる。ただ、ここでぜひとも注目してほしいのは、母親は子どもに滑り台を勧めたかと思うと、滑り終えた子どもの目の前に敷かれていたマットを見て、「ごろんは？」と声をかけ前転するように指示していることだ。そして、子どもは戸惑いつつも母親のことばに従って前転をしたのに、ぎこちない動きだったことに対して母親が駄目を出していることである。母親の言われるままに行動しているにもかかわらず、それがうまくできないと否定的な評価を下される。子どもにしてみれば、たまったものではない。母親を頼っているにもかかわらず、このように言われたら誰でも強い困惑を覚えるのではないだろうか。

次回は、なぜ母親がこのような関わりをせざるをえなくなったのか、その背景について考えてみよう。

HIV感染者の糖尿病はじめ長期合併症にどう対応するか！

長期療養時代の HIV感染症 / AIDS

B5判・268頁・2色刷 定価(本体6,800円+税)
ISBN 978-4-7849-5494-0

東京都保健医療公社豊島病院 副院長
味澤 篤 編

マニュアル

●抗 HIV 療法 (ART) の進歩で HIV 感染者の予後が改善した反面、非 HIV 感染者と同様に様々な長期合併症が問題となり、それに伴う死亡例が増加しています。その対応には HIV 感染症 / AIDS 診療の枠を超えた幅広い知識が必要となります。


●本書はがん・感染症センター都立駒込病院 30 年間の診療エッセンスを結集し、**長期合併症への対応、専門医への相談時期、よくみられる AIDS 疾患 / 状態、検査、口腔ケア、曝露後予防**など、HIV 感染症 / AIDS 診療全体を通して必要な最新情報をわかりやすく解説しました。



好評
発売中

主要内容

1. 総論
 1. HIV 感染症 / AIDS の経過
 2. 検査
2. HIV 感染症 / AIDS で問題となる長期合併症
 1. 内分泌疾患 (糖尿病 / 脂質異常症)
 2. 腎疾患 (慢性腎臓病 (CKD) / 高血圧症)
 3. 心血管疾患 (虚血性心疾患 / 脳梗塞)
 4. 骨疾患 (骨代謝異常)
 5. 口腔ケア
 6. 肝疾患 (B 型肝炎 / C 型肝炎)
 7. 非 AIDS 指標悪性腫瘍
 8. 精神障害
 9. 薬物乱用・依存
 10. 禁煙指導
3. AIDS に合併する主な疾患・状態
 1. 真菌疾患 (ニューモシスチス肺炎 / カンジダ症 / クリプトコッカス症)
 2. 細菌疾患 (結核 / 播種性マイコバクテリア・アビウム症 / サルモネラ菌血症)
 3. 原虫疾患 (トキソプラズマ症 / クリプトスポリジウム症 / イソスポラ症)
 4. ウイルス疾患 (サイトメガロウイルス感染症 / 単純ヘルペスウイルス感染症 / 進行性多巣性白質脳症)
 5. 腫瘍 (AIDS 関連悪性リンパ腫 / カポジ肉腫)
 6. HIV 関連神経認知障害
4. その他
 1. HIV 感染者とワクチン接種
 2. 曝露後予防

 **日本医事新報社**
〒101-8718 東京都千代田区神田駿河台2-9

ご注文
は

TEL : 03-3292-1555
FAX : 03-3292-1560
URL : <http://www.jmedj.co.jp/>

書籍の詳細情報は
小社ホームページをご覧ください。

医事新報

検索

